退官

諸君の真剣なまなざしと丹精なレポートや感想文によって、わたしは眼前の実物による「経験知」というものの重みを実感させられた。

質の高い先端医療、安全な医療の場の提供。健全経営。病院職員のご協力を得ましてこの三つの目標を達成しつつあります。

定年退官に当たって

大学院医歯学総合研究科　教授
朝倉　均

昭和63年9月前任の慶応義塾大学医学部内科学教室から新潟大学医学部内科学教室第三に二代目教授として赴任してからB年半経ちました。第三内科は消化器内科学の研究、教育、診療が担当ですので、これらの研究と診療の面白みを強調しましたところ、若い優秀な医師が一緒にやりたいということで、多くの門下生が誕生しました。研究は世界に通用するレベルで、かつ臨床にも役立つものを求めましたので、欧米のインパクトの高い学術雑誌に多くの論文を掲載することが出来ました。このことを今後若い人が継いでくれると思っております。

また、最後の2年は医学部附属病院院長に選ばれました。三つの目標、すなわち大学病院として質の高い先端医療を、大学病院で多く起こる医療事故に対して安全管理を充実して安全な医療の場を患者さんに提供すること、および病院の健全経営を掲げて努力しました。病院職員のご協力を得ましてこの三つの目標を達成しつつあります。

新潟の地にきましてまず驚いたことは冬の雷です。雷は関東地方では夏の風物詩ですが、新潟の冬空をよく見ますと積乱雲がにょきにょきと空高く昇っているのです。新潟の雪雲は日本海海水の暖かさとシベリアの寒波によって作られることを知りました。この雪が山に積もり、初夏に向けてゆっくり溶けることは自然のダムを意味し、新潟の自然に福音をもたらしていることを知りました。新潟の地で多くのことを学びました。

敗戦のころ

医学部保健学科　教授
川崎　了二

新潟の農村に生まれ小学3年の夏休みに敗戦を迎え、休み明け早々それまでとは正反対な趣旨の訓示を拝聴し、おって修身や国語の教科書のあらかたに黒々と墨を塗るよう指導（むろん強制）され、ショックでした。想えば、それは“戦後教育”のはじまりでした。貧困の当時田んぼには、おびただしくトノサマガエルがいました。捕まえてきて、ミカン箱の台にくくりつけ、男の子なら持っていた切り出しナイフで、安全カミソリと青竹をつかってメスとピンセットを作り、“解剖”をやりました。内臓をめちゃくちゃいじくっていて、ふと切り離れた心臓が動いているのを見たときのショックは、今でもまるでトラウマのようにしつこく残っています。あの“感動”を学生諸君にとおもいつつ早いもので、学校と縁が切れるときがきています。ウシガエルの神経筋標本（生物学講義中の示説）に対する諸君の真剣なまなざしと丹精なレポートや感想文によって、わたしは眼前の実物による「経験知」というものの重みを実感させられてきました。さて……。諸君（特に理系）は一般教育の実験をぜひ履修なさることです。“3

Kはごめんだ。だいいち選択科目だ”という人がいます。明治生まれの農機具（マンゴクなど）職人だった祖父は、成人したわたしに、“若いときの苦労は買うてもやれ！”。当時、その含意はわかりませんでしたが、諸君も同様でありましょうか。かんたんですが、幼稚なふたつのショック体験の思い出を枕にして、退官のことばといたします。

退官にあたって

医歯学総合研究科　教授
伊藤　寿介

本年３月末日で定年を迎えることとなった。1961年に新潟大学医学部を卒業して以来、ほとんどの歳月を旭町キャンパスで過ごした。最初は脳神経外科を専攻したが、やがて画像診断の魅力に取り付かれた。脳血管造影の勃興期に遭遇し、脳血管造影の静脈相の解析に寄与することが出来た。ついで、エックス線ＣＴ、磁気共鳴画像が開発され、画像診断は革命的に進歩発展した。偶発的なこととはいえ、その渦中に身を置くことができたのは誠に幸運なことであった。私には研究、診療、教育の三つの義務があった。前二者は、勿論、悩みに遭遇することも多かったが、概ね楽しむことが出来た。教育に関しては、医・歯両学部で携わったが教育のシステム、設備、および学生の学習意欲、学習の姿勢についてずっと欲求不満であった。教育のシステムは現在盛んに議論され、改良の方向に向かっているので大いに期待したい。しかし、最も肝心な点は学生の学習意欲、態度である。学習の動機づけの重要さが強調されたりするが大学に入ってからでは遅すぎるのではないか。肝心なのは学習の動機づけではなく、中、高校時代に人生への動機づけを自ら考えさせる機会を多く与えることだと私は思う。定年というとなにか重大な転機という認識が一般的なようであるが、長い人生の流れの一齣にしか過ぎない。私の生命の定年まではまだ多少の余裕があるようなので心を新たにしていろいろな分野で今後の人生を楽しみたい。

肝心なのは学習の動機づけではなく、中、高校時代に人生への動機づけを自ら考えさせる機会を多く与えることだ。

大学人を終えるに当って

工学部　教授
岡本　芳美

私が大学人になったきっかけは、昭和34年に大学学部を卒業して建設省で10年間の河川行政技術者生活を送り、８回目の転勤で建設大学校の教官という職にあった時、教官から新潟大学の教授になられた人の招聘に当たられた方にたまたま会った事からです。私は、それまで研究という仕事に全く無縁であり、博士号も持っておらず、普通ですと大学の教官になれるはずがなかったのですが、専門に関する単独著書を持っていたため、新設の工学部土木工学科の助教授として資格認定されたようです。

私は、当時、大学を好きな学問・研究をしたい人達が専門別に集まっている場である。そこに居る人達は、学問・研究それ自体が目的で、社会に貢献する事などあまり考えていない事の方が多い。しかし、それでいながら社会に大変貢献している。すなわち、大学は、高等教育機関ではなく、学問・研究の場である、と考えていました。

私が大学に移って以来33年間が経ち、この間、大学を取り囲む環境は、激しく変わってきて、更にもっと激しく変わりつつあります。今の時点で私が行政技術者から大学人に転じたとしたら、大学はどういう場であると定義したでしょうか。

大学を取り囲む環境は、激しく変わってきて、更にもっと激しく変わりつつあります。